

合格発表の時期がやってくると思
い出す。2年前のこの季節を。

この4月から3年目の中大キャン
パスライフを謳歌しているA子は当
時、東京のことなど右も左もわか
らない純な高校生だった。

2月末、すでに中大合格の切符を
手に入れていたA子だったが、彼女
は国立大学への夢を追いかけて受験
場に行った。しかし第1希望の国立大
学には不合格。多摩での一人暮らし
を余儀なくされたのだった。

もちろん彼女
は落ちこんだ。
浪人も考えた。

しかし、受験生活の中で自分が闘っ
てきた姿を思い返すと、がんばっ
て自分を悔いることはなく、自信を
持って中大への入学を決心した。

入学手続きが遅かったために新居
探しや引越しの準備で、毎日が嵐の
ように過ぎていった。

だがその中で彼女の母だけはその
スピードに追いつけずにいた。諸手
続きに奔走する一方で、娘が自分
の手を離れることを実感できずにいた
のだ。そんな母とは対照的に娘は一
人旅立とうとしている。母は中大入

学という決断をさせたことを後悔す
らしていた。

そして複雑な思いを抱えたまま迎
えた入学式当日。

そこでこの親子を迎えたのはキャ
ンパスに溢れかえる学生たちだ。あ
まりの喧騒に気後れしていた親子が
ひとりの学生に出会った。この学生
は普段以上の人ごみで戸惑っていた
親子を体育館まで親切に案内してく
れたのだ。

母の心は変わった。中大なんて、

思い出す…… 母と娘の心開いた入学式

東京なんて、と
思っていた心の
闇がさーっとひ

き、新しい希望の光が差ししてきた。
こんな学生のいる大学なら娘を預け
ても大丈夫。こう思えるようになって
たのだ。

澄み渡る青空の下、桜が咲いてい
た。

そしてことしもこの大学に新たな
学生がやってきた。誰もが入学への
ドラマを持っているだろう。そして、
ずっと昔を思い出すよう
に話したA子のもとにも
新しい春が訪れようとし
ていた。

(虹)

1月も末、となると、受験生たち
は最後の追い込み時期である。むろ
ん受験校は決まっている。周りの人
間がすっかり受験モードの中、彼は
あせていた。じつは、中央大学の
願書を出す期日が1日過ぎていたの
だ。彼が受験しようとしていたのは
総合政策学部。

「どうしよう……」。どうもこうも
ない。期日はすでに過ぎてている。家
族もあきれ果てて、「まあ、仕方
ないな」「先に受験料を入金したの
に、無駄になっ
ちゃったわね」
と家中タメ息が

1日遅れの出願…… トタバタ受験日記

漏れるばかり。「バカだな、おまえは」
と言われただけ、かえってツライ
というか。

そのときである。電話が鳴った。
「中央大学入試課の者ですが……」。
不意の電話に驚き、思わず聞き返す。

「え、入試課?」。すると、「ええ。
ところで願書の件なのですが、1
日過ぎておられましたよね」。ええ、
とうなだれる彼に電話の
声は、「ですが、受験料
は期日前に振り込んであ
るので、嘆願書を送って

いただければ、受験ができるように
配慮いたしますが……」。

奇跡、と思えたそうである。彼の
心中では、その日のうちに嘆願書を
書いて送り、受験票を手に入れた。

そして、受験当日。こんどは遅れ
まいと、彼はテスト開始の1時間前
に学校に到着した。8号館の大教室
に入ると、まだ誰も来ていなかった。

「みんな余裕だなあ」
そうこうするうちに30分がたった。
まだ誰も来ない。彼のあせりはピー

クに達していた。
「教室を聞
違えたかな……」。

そのとき、1人の受験生がやってき
た。教室は合っていたのである。そ
の後3人受験生が現れ、大教室に5
人という人口密度の低さの中で受験
したものだ。

結果は見事合格。彼の受験番号は
もちろん最後。トリの栄冠だった。

入学式にもゆめゆめ遅れず、ずい
ぶん早めの到着だったそうだ。つぶ
やく。「時間に遅れるんじゃないか、
となにかと気になって。トラウマで
しょうか」

(慶)



2003年2月。ついに、中央大
学グリーンテラス、そして白門プロ
ムナードが竣工した。工期1年。満
を持してのお目見えである。もうモ
ノレールを降りてからいちいち駅を
でる必要もないし、体育の時もわざ
わざ迂回しなくてもいいのだ！モ
ノレールを降りたら学部棟まで一直
線。新サークル棟も完成して、まさ
に中大☆リニューアルである。

春うららかなグリーンテラスに、
4年生Aさんとサークルの後輩Bく
んの姿がありました……。

「先輩、見てくださいよー。すつ
げえキレイです。どこもかしこも新
品ですよ。あ、案内所もガラス張
りで。中の人が焼けしそうですわね」
「そうね。でもどんなにキレイで
も、4月になったらどうせサークル
勧誘のビラまみれになって、雨なん
か降った日にはグチョグチョにな
るんじゃないの？」

「あ、グリーンテラスでは勧誘活
動禁止だそうです」

「そ、そう。でもホラ、たしかに

モノレールから学部まで

はつながったけど、サー
クル棟まで行くのはやつ
ぱり面倒じゃない。いつ

たんだ下りなきやいけなし。どうせ
ならサークル棟ともつながってれば
よかったのに。そう思わない？」

「エレベーターもついているし、い
んじやないですか？」

「うっ。それなら見てごらん！
周りの木！何の木か知ってる？」

「えーと、大きいほうがケヤキで
小さいほうがサ
ツキです」

語らうふたり グリーンテラスにて

「……よくご存知で。じゃあ東京
盆栽ってホームページ見てごらん。
ケヤキは、盆栽売れ筋ランキングベ
スト5に入ってるのよ。コメント欄
に、ケヤキは1500年の長寿の
木が存在する縁起のいい植物です」。

考えてみなさいよ。府中や国立のケ
ヤキ並木を……。府中には樹齢80
0歳・幹周10mのケヤキもあるのよ」

「はあ。それがなにか？……なん
でそんなに詳しいんです？！」



Aさんの話が長くなり
そうなのでまとめるが、
ケヤキは事実、寿命の長
い木である。いまグリー

ンテラスの脇を彩るケヤキが順調に
育って、育って育って……あんな小
さなプランターなどつき破り、コン
クリートの底に根は伸びて（あそこ
は3階なんですよ）、さながら並木道、

あるいは空中庭園の趣、となるかも
しれない。それはそれで新たな名所
になるかもしれないけど、もしかし

たら木の重みで
グリーンテラス
が、バキッということだつて……。

まあ、ケヤキが大きくなるまでには
1000年かかるだろうし、その時
の中大関係者が考えればいいことで
はあるが。それまで中大が存在して
るかって？ します（断言）。

さて、語らう2人、Aさんはヒー
トアップしていた。

「それに私たち文学部にとっては、
また文学部は通路扱いかい！つて感
じなのよ。失礼な話よね！」

「……先輩、僕にそれを言われて
も困ります。そういうことは事務室
で言ってください。それにしても今
日はどうしたんですか。別に文句の
つけようはないじゃないですか。グ
リーンテラスに白門プロムナード。
ネーミング・センスはともかく、新
サークル棟だつてデザインーズマン
ションみたいにオシャレでぴかぴか
だし。これでいままでの、“山の中
の白い要塞”てな中大のイメージも
払拭できますよ」

「だ、だつて……私ら4年生はす
ぐ卒業しちゃうんだもん！ せっか
く便利になったのにもう使わないも
ん。最後の1年、不便なの我慢した
のに！しかも今年の新入生はいきな
り便利じゃない。そんなのズルイ！」
「……」

「……」

「……」

(兎)

知ったかぶりという名の勘違いは
たちが悪い。ハズレていたときのリ
スクは測り知れず、バカのレッテル
さえ頂戴しかねない。たまのことな
らまあだれだつてあるだろう、ミエ
張りたいたときも。が、文学部のEさ
ん、やたら多いのである。

「最近の子は日本文学を知らなす
ぎる」という店長に、「そうですよね、
ホントに」とE子は返した。バカッ

話から、なかなか高尚な話に盛り上
がつてきたところである。

「じゃあ、お前、しなだれるの意
味分かるか」ナンテ。店長なんてこ
と聞くんですか。

(……しなだれる↓品垂れる↓)

「がっかりすること！」

「お前が、最近の子だよ」

店長、なんてこと聞こうとしたん
だろう、ホントは、とE子はいまだ
に疑問である。

またある日の学食にて。E子は「山
菜そば」を食べたことがなかった。

「きょうは、これにしよう！」と決

めて食券のおねえさんに言った。「や
まなソバ、ください」

ソバにいた友達も、どんなソバだ
よつて、突っこみ入れたかっただろ
うに。おねえさんが、やまなの正体
をすぐ理解してくれたのが、唯一の
救いだったけれども。

などなど、これはE子の堂々たる
勘違いのほんの「一握りの例」なの
であります。

知つたかぶりの……
まれに見る勘違い

女になるのだ
つてボーボ

ワールは言いました。

《ひとはバカに生まれるのではな
い。バカになるのである》

つて書いてありました。書名は、

『まれに見るバカ』

ほかに、あるよ。

『バカにつける薬』『バカのため
の読書術』『このバカを見よ！』『バ
カとの闘い』……。

一冊どう、とすすめたら、
E子は言ったつて。「バ
カバカしい」

(穂)



A子は、バイトもフリーター並み
にこなすし、思い立ったら即実行。
一言で言えば、「超活動家」である。

それはいいのだけれど、いつも「オ
チ」がつきまとう。なぜだか。

1 昨年オープンしたデイズニー
シーに、彼女はまだ行ったことがな
かった。やつとことしテストの後、
3人組でで長き夢は実現した。平日で、
冬まつただ中、他の大学はまだテス
ト期間中。好条件が重なつて、考え
られないくらい
人がいなかった。

「いつは春から……
『夢の国』のカタストロフィー

』というカタ
ストロフィー。

全てのアトラクションが5分以上待
たされることもないほどに。

願つたりかなつたりで、「デリシャ
スデイズ」というイベント実施中。
△シーのレストランで特別メニュー
が手ごろなお値段で食べられます！
▽アトラクションをスムーズに楽
しんで、おいしいものも食べた！

新年早々、夢のような一
日を満喫したのである。

晚餐も、食べ放題をこ
こぞとばかりに食べた後、

(青)

A子はもう一人の友だちをむりやり
誘つて、最大の目玉？であるジェッ
トコースターに最後にもう一度乗り
に行つた。もうすぐ閉場なのに2人
はなかなか帰つてこない。「2回乗つ
てるんじゃないの？」とシビレを切
らしたころ、トボトボと帰つてくる
2人が見えた。なぜかサービスマン
ターの中から。

聞けば、「闇の中を絶叫している
間に、おみやげを、落としちゃつた
の」というカタ
ストロフィー。

自分用にためつすがめつ、あれほど
厳選したものを。「ここではレシー
トがあればお店で同じものをもらえ
るんじゃない」「それが、あればね」。

これもない、救いがない。
「見つかつたら連絡する」という
言葉だけを頼りにA子はシーを後に
した。立ち直りの早いA子だが、家
に帰るまでの道のりは魂が抜けたよ
うだったという。「夢の国」からの
吉報、未だ来たらず。

吉報、未だ来たらず。

冬休みの凍てつく朝、彼女は愛車で（原付だが、愛車である）アルバイト先に急いだ。

その日は朝の9時からアルバイトだったが、寝坊して、家を出たのは8時55分。家からアルバイト先まで、信号待ちがなければ約5分。セーフかアウトか。

いくつかの信号をクリアし、目の前にお店が見えた。駐輪場まであと数メートル。現在時刻は8時58分。

間に合う！ あとは右折して愛車を止めるだけだから。彼女は安堵した。その瞬間である。悲劇は起こったのだ。

クラッシュ!!

宙に舞いつつ彼女は?

店へ右折にかかったとき、「バーン」という大きな音とともに、後ろから何かが彼女の愛車めがけて突っこんできた。車が！ 気づいたときには道路に放りだされていた（目撃者の証言では、車のボンネットにはね上げられてバウンドしたらしい）。

まさかこんなところではねられるなんて……お店の目と鼻のところ。宙に舞いつつとっさに思ったのは、

「遅刻だ……」

だったという。ショックと動揺、

混乱する意識のなかで、一途に、「今日の代わり見つかるかな……」と。

幸い、ケガは大したことなく（本人はそのとき、そうとは意識していない）、朦朧とした意識の中でみずから起き上がり、歩いて救急車に乗りこんだ。愛車は全損でもそれがショックを吸収してくれたから軽傷で済んだんだわ、と感謝しつつ。

救急車に20分も乗って遠い病院まで運ばれ（知らない病院に一人ぼつち）、警察署に呼ばれ（もちろん警察署の場所などわからない）、それでも、お店に顔を出したのだそうである。気丈にけなげに、数時間後に。実のところは、全身打撲であちこちに擦過傷を負い、出血もしていた。翌日には腫れ上がり、数日間は歩行困難だったというのである。

無謀追いつ越しのドライバーを責め

ず、これからは余裕をもって家を出よう、と固く誓った彼女は、法・政の「誠実の人」である。

(奈)



文学部のTさんは、「JR東日本の友」といつていい間柄である。なにしろ、彼女は東京のそのまた先から通学しており、立川までは絶対にJRのお世話にならない。毎日毎日、往復5時間の道のりをがんばって通学しているのだ。定期代も馬鹿にならない。

嗚呼それなのに、「なんでこうなの。もうイヤ！」とオカシムリである。JRの車内ではいつも、ちよつと変わった出来事が、ピンポイントでTさんを狙っていると言のうのだ。

遠距離なTさんの生まれ出づる近親憎悪

たとえば朝、座席でウトウトしていたら周りのサラリーマンはおもむろに髭を剃りだすわ、学校帰りにホッと一息ついていたら、横に座っていた客がいきなり釜めしをかきこみだすわ（まあ、長旅ですからね）。先日は、信号機の故障によつて電車が途中停車してしまい、車内に閉じこめられてしまった。春なお浅く、親心なのか、密室状態の車内座席下を暖房が「もうええっちゅうねん」というほど暖めてゆく……。郷ひろみもびっくり

のアチチ状態であつたそうなの。そして今、彼女を憎まず憎い男がいる。それは、某教科担当の某教師。年齢おそらく50代……に似た人。何のこっちゃという感じだが、髪型・天然のスキンヘッド。服装・つねにスーツ。はつきり言えば、はげ頭でかつスーツの男性は世にごまんといるが、彼女いわく、

「頭の形まで先生に似た人がいっぱいいるの！」

とにかく、禿頭スーツ姿の男性を見かけるたびに『あつ、先生?!』

か心身症? 先生は現在、ホームページは開設していないが、「もしホームページがあれば掲示板に『先生に似た人をよく電車で見かけます。何とかしてください』って書きこんでやるのに!」

Tさんは興奮気味に語る。来ないそうだが（そりゃ、遠いもの）、新年度がはじまる以上、JR東日本の車上にて彼女の悪夢のようなドラマの開演も間近……。

(兎)

「学生さんはお金がない！」

かつて某携帯電話会社がこんなキヤッチフレーズを使って、学生向けの料金半額キャンペーンをしていた。でも、今どきの大学生、ホントにお金がないのだろうか……。

法学部2年のMさんの趣味は海外旅行。長い休みに入ると必ずと言っていいほど日本にいない。友人たちは、リッチな彼女のことをいつもうらやましがっていた。

そんな友人の1人であるQさんは、大学の帰り道、Mさんと一緒になることが多かった。お互い、帰りは2時間近くかかる遠距離通学。授業が終わるのが7時や8時になると、お腹もペコペコだ。だから2人は、よくお菓子やジュースなどを買い食いしながら遠き家路をめざす。高幡不動では、モノレールと京王線の乗り換えの際、「京王ストア」の前を通る。夕方のスーパーからは焼き鳥やたこ焼の美味そうな匂いがして、胃袋のほうが蠕動運動をはじめるのである。

今宵もつられるように立ち寄ったそこで、Qさんは、Mさんの驚くべき行動を見てしまったのだった。

京王ストアへ入ってMさんがまず向かうのは、生菓子コーナー。プリンやシュークリームなど、日持ちしないデザートたちには、閉店近くになると、値下げのシールが貼られる。「50円引き」や「半額」など。Mさんのお目当てはこれだった。

趣味は海外旅行 リッチなMさんの懺悔情

ふだんあまりスーパーに行かないQさんは、Mさんに教えられるまでこんなお買い得セールの存在を知らなかった。一方Mさんは……。

「高校のときは、このシールをはがして、他のセールじゃないお菓子里に貼り直したりしてたんだよね〜」
今ではさすがにここまでではないと言うが、Mさんはかなり前からこのセールの常連だったのだ。見た目リッチのMさんは、実はこうして節約をしていたのだった。やっぱり「お金がない！」のだ。(○)



昨年の暮れ、12月9日月曜日。商学部2年のC子は、この日を忘れることができない。なぜなら、この日首都圏は稀な大雪にみまわれ、朝から多くの交通機関がマヒするなどの大混乱。にもかかわらず、この日C子は「奇跡的に」多摩キャンパスまでの通学を成し遂げたのだった。

通常往復3時間半の道のり。これでもかなりしんどい。しかしこの日は6時間。もう「旅」ですよ、これは。雪降る中大日帰り旅行記」の始まりである。

乗る電車すべてタイヤが乱れに乱れ、とにかく待たされる。まあ、このくらいは覚悟していた。たどり着いた乗り換えの駅では、

「混雑を防ぐために、ただいま入場制限を実施しております……」

「うるさい日本の」アナウンスは繰り返した。しかし、むしろ改札前では通勤ラッシュ並みの大混乱。いや、身長150cmのC子にとって、密集して20分も同じ場所に立ち続ける方がもつと息苦しく、辛いものであった。

「もう帰りたい……」

こんな思いまでして学校へ行くなんて。

「それに、○○ちゃん
はきよう休むって言ってたし……」

思考はどんどん「ひきこもり」の方向へ進む。

しかし、C子は思い直した。きょうは絶対に休めない授業がある。

問題なのは、実際に大学まで行ってみないと、休講かどうかは分からないことだ。自宅でTVを見ている友人からの情報

によれば、

「多摩地方は
12〜15cmの積雪の見込み」

「モノレールは運転見合わせ」
これはかなりヒドイ状況である。

だからといって大学は休講なんだろうか。C子はひたすら大学へと向かうしかなかった。こんな大雪でもパワフルに運行していたのは京王線。

多摩都市モノレールが動いていないため、ふだんは滅多に乗らない京王多摩動物園線を使うことにした。

「こんな日に乗ることになるなん



て……」

かわいらしい動物たちが車体に描かれた電車が、吹雪の中を走る姿はなん

だか場違いに思えた。乗客は中大へ向う学生と教員が99%を占めていた。このような大雪の中、動物園に行く人がいるわけがない。

さて、駅に着いた。しかしこれらがたいへんだ。多摩動物公園駅から中大までは延々と上り坂が続く。

「雪で滑ったらやだなあ」

一步一步慎重に足を進めて

いった。どんど

ん抜かされていく。でも、そんなことを気にしている場合ではなかった。

C子は必死だった。そして、雪の中心のサンダルを履いている女の子にまでも抜かされた。こればかりは悔しかった。こっちは頑丈な運動靴を履いていたのに……。

すると突然目の前が真っ白になった。木に積もった大量の雪が道に落ちたのである。

「これが雪ケムリかあ」

C子は、北陸でも北海道でもなく中大の大自然の中で、生まれて初めて雪けむりというものを見ることのできた。ナダルは途中何度もあった。「まったく、何てとこりに来てしまったんだらう」

そしてやっと中大の門が見えてきた。門をくぐり、いざ商学部棟へ。迷わず掲示板へ直行した。もう半分は諦めていたが、果たして授業は全学部休講であった。

とりあえず近くのベンチに座って、一服。いえいえ、たばこはやってないよ。気が抜けるやらなにやら、疲れがどっと出たのである。

が、しかし、である。はるばる来てみれば休講で、やるせない気持ちでいっぱい……というわけでもなかったのだ、不思議に。

むしろ、達成感に似た気持ちで満たされていた。

元気な学生たちが、キャンキャン言いながら雪合戦をやっていた。これからまた長い帰途が待ってはいるけど、ちよつとすがすがしい気分が浸っていたC子であった。(Q)